

「祖父母に聞く生活史調査」に見る住まいと暮らし

末 広 菜 穂 子

目 次

1. はじめに
2. 調査概要と調査対象者の属性
3. 住まいの形態，広さ，設備
4. 間取り図に見る人々の暮らし
5. まとめ

1. はじめに

日本の伝統的民家は，土地の風土や風習，どのような生業であるかなど，人々が置かれていた生活環境と不可分な関係を保ちつつ長い年月の間に独特の様式を築いてきたと言われている。従って，かつての日本の民家は，暮らしの場として，人々の日常の生活ぶりをよく示すものであった。しかし，第二次世界大戦後の日本の経済成長や社会変化により，人々の住まいは大きく形を変え，農家や町家などの伝統的民家も次々と姿を消し，過去の住まいの形状やそこでの住まい方についての記憶は急速に薄れつつある。兵庫県の箱木千年家をはじめとする貴重な民家建築を文化財として保存しようとする活動が戦後本格化し，一方で民家についての地道な調査記録が進められるなど，記憶を呼び起こし，後世に伝えていく企てがおこなわれてはいるものの，近年の街や村の姿形変化は速さを増し，かつての住まいや暮らしについて私たちが情報を得る手だてはますます限られたものとなっ

ている。ひとたび住居の形が失われてしまえば、そこに住んでいた人々の過去の日々の暮らしを蘇らせることは容易ではない。

ここでは、人々がかつてどのような住まいにどのように暮らしていたのかについて、高齢者の子どもの頃の記憶を聴取したデータを分析することによって、検討しようとしている。そのほとんどが現在すでに形を残していない、人々の記憶に残るだけの住まいの形と暮らし方についての調査⁽¹⁾である。個人の記憶に依存しているため、個々のデータに正確さに欠ける部分もありはするが、それを多量に蓄積して数量的に分析し、さらに、世帯人数や家業など、生活の基本データと併せて吟味することによって、人々の過去の住生活を立体的に描き出すことを、この調査は目的としている。

なお、本稿では、平成12年12月から平成13年1月にかけておこなった調査データを利用し、分析をおこなった。この調査は、本学で私の「生活経済史」の授業を受講している学生が、その祖父母ないしはその年代に近い人の子どもの頃の生活について聞き取ったものである。論述に先立ち、調査にご協力いただいたすべての方々に深く感謝の意を表したい⁽²⁾。調査の対象となったのは、明治期後半から昭和初めごろに生まれ、その多くは子ども時代を中四国地方で暮らしていた人々である。従って、明治末から太平洋戦争前にかけての、主として中四国地方の住生活の一端がここでは明らかにされるであろう⁽³⁾。

2. 調査概要と調査対象者の属性

調査は以下のようにしておこなった。平成12年12月に調査方法を説明して調査用紙を配布し、調査対象者と直接面談して調査するよう、学生に対し指示した。翌平成13年1月に338票の調査用紙を回収し、調査対象者が昭和11年以前に生まれているものをその中から選択し、318票を有効回答とした。

調査項目は子どもの頃の生活状態全般にわたっているが、本稿では、そのうちの住生活にかかわるデータを中心に分析をおこなうことにする。住

生活に関しては、選択・記述式による質問項目に答えてもらうとともに、子どもの頃に居住していた住居の間取り図を略図で示してもらうことによって、より具体的に調査対象者の住生活を知る手がかりとした。間取り図については、無回答や不確かなものを除いて、318票中276票を有効回答として処理した。

表1 調査対象者の性別 人

男性	120(37.7%)
女性	198(62.3%)
合計	318(100.0%)

表2 調査面談者との関係 人

祖父	113(35.5%)
祖母	185(58.2%)
おじ	4(1.3%)
おば	1(0.3%)
曾祖母	3(0.9%)
大おじ	1(0.3%)
大おば	1(0.3%)
知人	10(3.1%)
合計	318(100.0%)

表3 調査対象者の生年 人

明治26～30年	1(0.3%)
明治31～35年	0(0.0%)
明治36～40年	6(1.9%)
明治41～45年	9(2.8%)
大正1～5年	42(13.2%)
大正6～10年	70(22.0%)
大正11～15年	93(29.2%)
昭和1～5年	88(27.7%)
昭和6～10年	8(2.5%)
昭和11～15年	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

表4 調査対象者の居住地 人

	子どもの頃	現在
広島県	151(47.5%)	182(57.2%)
愛媛県	25(7.9%)	27(8.5%)
島根県	25(7.9%)	19(6.0%)
山口県	24(7.5%)	20(6.3%)
岡山県	20(6.3%)	21(6.6%)
鳥取県	7(2.2%)	6(1.9%)
大分県	7(2.2%)	6(1.9%)
福岡県	7(2.2%)	6(1.9%)
香川県	6(1.9%)	6(1.9%)
長崎県	6(1.9%)	5(1.6%)
兵庫県	6(1.9%)	3(0.9%)
徳島県	5(1.6%)	4(1.3%)
大阪府	4(1.3%)	1(0.3%)
満州	3(0.9%)	0(0.0%)
佐賀県	2(0.6%)	1(0.3%)
朝鮮	2(0.6%)	0(0.0%)
沖縄県	1(0.3%)	1(0.3%)
岩手県	1(0.3%)	1(0.3%)
岐阜県	1(0.3%)	0(0.0%)
宮崎県	1(0.3%)	1(0.3%)
高知県	1(0.3%)	1(0.3%)
京都府	1(0.3%)	0(0.0%)
台湾	1(0.3%)	0(0.0%)
熊本県	1(0.3%)	0(0.0%)
愛知県	1(0.3%)	0(0.0%)
山形県	1(0.3%)	0(0.0%)
福島県	1(0.3%)	0(0.0%)
富山県	1(0.3%)	1(0.3%)
和歌山県	1(0.3%)	0(0.0%)
鹿児島県	1(0.3%)	1(0.3%)
青森県	1(0.3%)	1(0.3%)
長野県	0(0.0%)	1(0.3%)
埼玉県	0(0.0%)	1(0.3%)
不明	3(0.9%)	2(0.6%)
合計	318(100.0%)	318(100.0%)

以下に、調査対象者の属性を簡単にまとめておく。表1に調査対象者の性別を、表2には調査面談者との関係を示している。318人中男性が37.7%、女性が62.3%であった。調査面談者との関係は、祖母が58.2%、祖父が35.5%となっている。表3に示すように、調査対象者の生年は明治から昭和まで広範に広がっており、大正中期から昭和初頭にかけて多く分布している。最高齢者は明治30年生まれ、最年少者は昭和11年生まれであった。

調査対象者の子どもの頃の居住地と現在の居住地を示したものが表4である。子どもの頃の居住地でもっとも多いのは広島県であり、半数近くが居住していた。愛媛、島根、山口、岡山などの中四国地方の県がそのあとに続いている。日本以外の満州や台湾に居住していた人も少数見られる。現在の居住地は、広島県がやはりもっとも多く、半数以上を占めている。子どもの頃と現在とで居住する市や郡が一致する人は178人(56.0%)であった。

子どもの頃の家族と世帯がどのようであったのかを見てみよう。表5では、まず世帯人数についてまとめているが、家族だけではなく同居している使用人も含んだ数字になっている。最大規模世帯は18人、最小規模世帯は2人で、全世帯の平均人数は6.9人である。6人から7人の世帯が多くなっている。世帯構成については、表6に示す数字より検討することができる。核家族の割合について見てみると、父母と子どもから成る世帯が180世帯(56.6%)、父母のどちらかと子どもから成る世帯が24世帯(7.5%)であり、合わせて204世帯(64.2%)が核家族世帯であった。祖父母世代、父母世代、子どもを含む三世代以上が同居している世帯は107世帯(33.6%)で、そのうちの2世帯は曾祖父、曾祖母それぞれ1人を含む四世代世帯である。従って、三世代以上が同居する拡大世帯より、父母と子どもから成る核家族世帯の方が、数が多くなっている。また、父母のいない世帯が7世帯(2.2%)あった。その内訳は、祖父母との同居が1世帯、祖父との同居が1世帯、祖母との同居が3世帯、おじ・おばとの同居が2世帯であった。

兄弟姉妹に関しては、表6と表7からわかるように、兄弟姉妹がいた世

帯は293人(92.1%)、いなかった世帯は25人(7.9%)で、平均して1.5人の兄弟と1.6人の姉妹、計3.1人の兄弟姉妹を持っていた。もっとも兄弟姉妹数が多いのは兄弟4人、姉妹6人、計10人というケースである。調査対象者自身は、表8に示すように、兄弟姉妹の中で1番目である人がもっとも多くなっている。

表5 世帯人数 人

2	3(0.9%)
3	15(4.7%)
4	22(6.9%)
5	43(13.8%)
6	61(19.2%)
7	59(18.6%)
8	47(15.1%)
9	27(8.2%)
10	25(7.9%)
11	6(2.2%)
12	3(0.9%)
13	4(1.3%)
14	1(0.3%)
17	1(0.3%)
18	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

表6 世帯構成(複数回答) 人

曾祖父あり	1
曾祖母あり	1
祖父あり	76
祖母あり	97
祖父母ともあり	61
祖父母ともなし	206
父あり	288
母あり	301
父母ともあり	278
父のみあり	10
母のみあり	23
父母ともなし	7
兄弟あり	250
姉妹あり	244
兄弟姉妹ともあり	201
兄弟姉妹ともなし	25
おじあり	14
おばあり	14
兄嫁あり	6
いとこあり	6
甥・姪あり	3
同居使用人	20

表7 兄弟姉妹人数 人

0人	25(7.9%)
1人	39(12.3%)
2人	58(18.2%)
3人	71(22.3%)
4人	54(17.0%)
5人	40(12.6%)
6人	15(4.7%)
7人	11(3.5%)
8人	3(0.9%)
9人	1(0.3%)
10人	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

表8 兄弟姉妹順位 人

1番目	93(29.2%)
2番目	78(24.5%)
3番目	59(18.6%)
4番目	47(14.8%)
5番目	20(6.3%)
6番目	11(3.5%)
7番目	6(1.9%)
8番目	2(0.6%)
9番目	1(0.3%)
11番目	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

調査対象者の世帯が従事していた職業を表9に示している。専業農家が152世帯(47.8%)と最も多く、兼業で農業をおこなっていた世帯33(10.4%)を加えると、農業従事世帯は6割近い(以下の分析では、この185世帯を農業世帯と呼ぶことにする)。製造業、勤め人はそれぞれ36世帯(11.3%)、35世帯(11.0%)とほぼ同数であり、サービス業21世帯(6.6%)と

商業18世帯(5.7%)がそれに続いている(以下の分析では、家業が不明の4世帯を除くこれら129世帯を非農業世帯と呼ぶ)。

表10と表11には世帯の働き手と働き手の人数を示している。働き手として多く挙げられたのは、父、母、兄、祖父、祖母、姉である。1世帯あたり2人の働き手を挙げた人がもっとも多く、1人、3人がそれに続いている。2人働いている世帯でもっとも多かったのは父母2人が働いているケ

表9 家業 人

農業専業	152(47.8%)
農業兼業	32(10.1%)
・漁業	4(1.3%)
・林業	3(0.9%)
・商業	3(0.9%)
・製造業	11(3.5%)
・勤め人	10(3.1%)
・その他	1(0.3%)
漁業	10(3.1%)
林業	1(0.3%)
製造業	36(11.3%)
商業	18(5.7%)
勤め人	36(11.3%)
サービス業	21(6.6%)
専門職	2(0.6%)
軍人	5(1.6%)
その他	1(0.3%)
不明	4(1.3%)
合計	318(100.0%)

表11 働き手人数 人

1人	110(34.6%)
2人	115(36.2%)
3人	46(14.5%)
4人	28(8.8%)
5人	4(1.3%)
6人	4(0.9%)
7人	1(0.3%)
8人	1(0.3%)
10人	1(0.3%)
不明	8(2.5%)
合計	318(100.0%)

表12 家業と母親の就労 人

	農業世帯	非農業世帯	合計
母が就労	124	48	172
母が非就労	45	75	120
有効回答	169	123	292

$\chi^2=34.696$, $df=1$, $p<0.001$

表10 働き手(複数回答) 人

祖父	43
祖母	31
父	277
母	172
兄	55
姉	27
おじ	4
おば	3
兄嫁	3
使用人	3

表13 家の経済状態 人

裕福	53(16.7%)
やや裕福	56(17.6%)
平均的	156(49.1%)
あまり裕福でない	34(10.7%)
裕福でない	15(4.7%)
不明	4(1.3%)
合計	318(100.0%)

ースであり、87世帯(27.4%)あった。1人が働いている世帯では、父のみが働いているケースがもっとも多く92世帯(28.9%)あった。働き手人数が多い世帯では、父母に加えて祖父、祖母、兄、姉が働き手に加わっており、おじや兄嫁、使用人などの回答も見られた。

母親が働いている世帯は全体の54.1%の172世帯、母親がいる世帯の57.1%だが、このことと家業との関わりを見てみると、表12に示すように農業世帯で母親の就労が多くなっている。

家の経済状態を近所と比較してどう感じていたかを表13に示している。近所と同じく「平均的」であったという回答が156人(49.1%)でもっとも多く、「裕福」「やや裕福」と感じていたという回答が合わせて109人(34.3%)となっており、自分の子どもの頃の生活を、平均以上の暮らしであったと感じている人がそうでない人を上回る傾向がうかがえる。

3. 住まいの形態、広さ、設備

調査対象者が当時住んでいた住居は、表14に示しているように一戸建てという回答が平屋と二階建てを合わせて309人(77.2%)と大半を占めている。住居形態と家業との関係を、農業世帯と非農業世帯について調べたところ、表15に示すように、農業世帯と非農業世帯で住居形態の分布に違いがあるのは明らかであり、農業世帯に一戸建ての平屋が多いことが認められた。

当時住んでいた家がどの程度の築年数だったか記憶している人に回答をしてもらった。その結果は表16に示すとおりである。築年数はばらつきが見られるが、中では築20年前後の家が多くなっている。築30年までの家をすべて合わせると152で、全体の47.8%を占めている。それより年数の古い家は99で全体の31.1%あった。古い築年数について見れば、およそ100年以上という回答が33人あり、さらに、およそ150年以上という回答が4人、およそ200年以上という回答が5人あった。築年数100年以上の33人について調べたところ、そのうち30人の家業は農業(兼業含む)であり、あとの3人

表14 住居形態 人

一戸建て(平屋)	229(72.0%)
一戸建て(二階建て)	80(25.2%)
共同住宅	5(1.6%)
間借り	3(0.9%)
不明	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

表15 住居形態と家業 人

	農業	非農業	合計
一戸建て(平屋)	151	74	225
一戸建て(二階建て)	32	48	80
共同住宅	0	5	5
間借り	1	2	3
合計	184	129	313

$\chi^2=26.023$, $df=3$, $p<0.001$

表16 築年数 人

～5年	28(8.8%)
～10年	41(12.9%)
～20年	54(17.0%)
～30年	29(9.1%)
～40年	9(2.8%)
～50年	20(6.3%)
～60年	16(5.0%)
～70年	10(3.1%)
～80年	10(3.1%)
～90年	1(0.3%)
～100年	18(5.7%)
～200年	15(4.7%)
回答なし	67(21.1%)
合計	318(100.0%)

の家業は商業であった。

また、当時住んでいた家が、現在も残っているかどうかを尋ねたところ、表17のような回答を得た。これによると、192人(60.4%)が「残っていない」と回答しており、残っていても、「かなり改築」されていたりして(23.6%)、当時の姿をほぼ残して現存している家は全体の14.5%に過ぎない。また、先述の築年数100年以上の33人について見てみると、そのうち「ほぼそのまま残っている」と回答したのが8人、「かなり改築しているが残っている」と回答したのが7人で、残り18人が残っていないと回答している。当時、築年数が200年以上の家5軒についてはすべて「残っていない」という回答であった。

1戸あたりの部屋数は表18に示すとおりで、4部屋がもっとも多く28.9%を占め、ついで5部屋(26.7%)、6部屋(15.1%)の順となり、1戸あたりの平均部屋数は5.1部屋であった。伝統的に農家の間取りは、いわゆる田の字型間割りを取る場合が多いため、4部屋がもっとも多くなっているであろう。前項で見たように世帯人数は平均で6.9人であったから、1人当たりの平均部屋数は約0.8部屋、1部屋当たりの平均居住人数は1.5人となる。住まいの広さを正確に示すような居住面積などの数字は、この調査で

表17 当時の住居の残存度 人

ほぼそのまま残っている	46(14.5%)
かなり改築して残っている	75(23.6%)
残っていない	192(60.4%)
回答なし	5(1.6%)
合計	318(100.0%)

表18 部屋数 人

1	1(0.3%)
2	16(5.0%)
3	32(10.1%)
4	92(28.9%)
5	85(26.7%)
6	48(15.1%)
7	12(3.8%)
8	9(2.8%)
9	7(2.2%)
10	8(2.5%)
12	3(0.9%)
14	1(0.3%)
15	1(0.3%)
16	1(0.3%)
19	1(0.3%)
不明	1(0.3%)
合計	318(100.0%)

は得られなかったため、住まいの広さに関しては本稿では部屋数を用いて以下、議論する。

部屋数は世帯人数や家族構成、家の経済状態などと関係がないのだろうか。表19は世帯の人数と部屋数との関係を示したものである。回帰分析をおこなった結果、回帰係数は0.288となり、t値は5.458で有意であるとわ

表19 部屋数と世帯人数 人

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	14	15	16	19	不明	合計
2		2		1													3
3		3	1	5	4		2										15
4		4	3	8	5	1		1									22
5		2	6	12	16	4	1	1		2							44
6		2	7	19	14	13	1	4					1				61
7			8	18	18	7	3	1	3	1							59
8	1	1	2	10	13	13	4	1	1	2							48
9		2	2	7	6	2			2	1	2	1				1	26
10			3	8	4	6		1		1	1			1			25
11				3	2	1	1										7
12				1	2												3
13					1	1			1						1		4
18										1							1
合計	1	16	32	92	85	48	12	9	7	8	3	1	1	1	1	1	318

部屋数=3.092+0.288×世帯人数
(t=8.094) (t=5.458)

表20 部屋数と家族構成 人

	核家族	拡大家族	その他	合計
1 部屋	1			1
2	14	2		16
3	16	16		32
4	64	27	1	92
5	58	24	3	85
6	29	18	1	48
7	5	6	1	12
8	7	2		9
9	3	3	1	7
10	3	5		8
12	1	2		3
14	1			1
15	1			1
16	1			1
19		1		1
不明		1		1
合計	204	107	7	318

$\chi^2=30.316$, $df=28$, $p=0.348$

表21 部屋数と裕福度 人

	裕福	やや裕福	平均的	あまり裕福でない	裕福でない	不明	合計
1 部屋					1		1
2	1	1	6	4	3	1	16
3	5	4	18	3	2		32
4	4	17	53	14	4		92
5	12	18	41	9	4	1	85
6	10	8	25	2	1	2	48
7		4	7	1			12
8	7	1	1				9
9	3	1	3				7
10	6	1	1				8
12	3						3
14	1						1
15			1				1
16	1						1
19		1					1
不明				1			1
合計	53	56	156	34	15	4	318
平均部屋数	6.8	5.3	4.8	4.2	3.7	4.8	4.9

$\chi^2=131.929$, $df=56$, $p<0.001$

かった。すなわち、世帯人数が約3.5人増えるごとに部屋数が1増えることを示している。家族構成との関係は次に見たのが、表20である。ここでは、前項で述べた父母と子どもから成る核家族、祖父母を含む拡大家族、父母のいないその他の家族の三つの範疇に世帯を分類して、部屋数との関係を

調べた。表20に示すように、核家族と拡大家族で部屋数に違いは認められず、部屋数は家族構成に左右されていない。表21では表13で分類した家庭の経済状態のグループ別に、部屋数がどう変わるかを調べた。ここでは、家の経済状態と部屋数との大きな関連性が認められる。裕福度別の平均部屋数を算出すると、表21に示すように、裕福であるほど部屋数が多くなる傾向がはっきりと確かめられる。このように、部屋数は、世帯人数や家の経済状態との関連性が大きかったことがわかった。

次に住居各部と付帯する設備、備品等について見てみよう。まず、屋根の種類が何であったか尋ねたところ、表22のような結果を得た。瓦葺きの屋根がもっとも多く172人(54.1%)で、茅葺き(15.1%)や藁葺き(15.7%)もほぼ同数の回答があった。瓦葺き屋根と茅・藁葺き屋根両方があったという回答もかなり見られるが、これが、母屋の屋根が瓦と茅や藁を組み合わせた混合形式の屋根であったことを意味するのか、あるいは、倉などが瓦で母屋が茅や藁の屋根であったことを意味するのかは不明である。

屋根の種類と家業との関係を農業世帯と非農業世帯に分けて調べたところ、表23に示すような結果となり、全体としては瓦葺き屋根が多いものの、やはり農業世帯においては、茅葺きや藁葺きの屋根が多く、その半数以上を占めることが確かめられた。

表22 屋根の種類 人

瓦	172(54.1%)
茅	48(15.1%)
藁	50(15.7%)
瓦+茅	10(3.1%)
瓦+藁	11(3.5%)
瓦+茅+藁	1(0.3%)
不明	26(8.2%)
合計	318(100.0%)

表23 屋根の種類と家業 人

屋根の種類	農業	非農業	合計
瓦	84	110	194
茅	48	11	59
藁	55	7	62
合計	187	128	315

$$\chi^2=54.718, df=2, p<0.001$$

住居内外のさまざまな設備や備品について、表24に保有状況を示している。平成4年度におこなった同様の調査結果を表25に掲げており、比較してみると、平成4年度調査も平成12年度も、「仏壇」、「時計」、「かまど」と

いう保有率の高い上位の三つは、若干順位の違いはあるものの変わっていないことがわかる。また、保有率の少ない下位に位置するものも、「自分の部屋」、「門」、「倉」、「椅子」など、両年度の調査に共通していて、ほぼ傾向としては同じであると言える。ただ、両年度で保有率に5%以上差があるものを拾ってみると、平成4年度より12年度の方が保有率の高いものとして、「廊下」、「ガラス窓」、「いろり」があり、平成4年度より12年度の方が保有率の低くなっているものとして、「かまど」、「神棚」、「井戸」がある。両調査の調査対象者の年齢差がおよそ6.3歳となるので、その年齢差が結果の違いに反映しているのか、あるいは地域差・職業差など他の要因が左右しているのかについては、さらに詳細な吟味をする必要がある。

表24 住居設備と保有率(平成12年度)

設備・備品	保有世帯数	保有率
仏壇	276	86.8%
時計	267	84.0%
かまど	264	83.0%
土間	261	82.1%
縁側	245	77.0%
前庭	209	65.7%
神棚	209	65.7%
井戸	205	64.5%
廊下	179	56.3%
ガラス窓	164	51.6%
両親の部屋	162	50.9%
自分の勉強机	145	45.6%
垣根	128	40.3%
いろり	127	39.9%
塀	89	28.0%
椅子	80	25.2%
倉	79	24.8%
門	70	22.0%
自分の部屋	66	20.8%
有効回答	318	

表25 住居設備と保有率(平成4年度)

設備・備品	保有世帯数	保有率
かまど	284	92.2%
仏壇	278	90.3%
時計	277	89.9%
神棚	244	79.2%
庭	234	76.0%
井戸	221	71.8%
両親の部屋	163	52.9%
自転車	156	50.6%
自分の勉強机	146	47.4%
廊下	140	45.5%
ガラス窓	134	43.5%
垣根	113	36.7%
いろり	102	33.1%
倉	100	32.5%
塀	91	29.5%
椅子	88	28.6%
門	65	21.1%
自分の部屋	54	17.5%
有効回答	308	

住居の設備や備品の保有状況が世帯の裕福度とどのように関わりを持つのかを知るために、世帯の裕福度を三つの階層に分け、各階層毎の設備と備品の保有状況を調べてみた。結果は表26に示すとおりであり、全般に、

保有率の高い設備・備品は世帯の裕福度と関わりが低く、保有率の低い設備・備品は裕福度と関わりが高い。裕福な階層ほど保有率が高いと言えるものとしては、特に、「自分の勉強机」、「自分の部屋」、「廊下」、「ガラス窓」、「門」、「両親の部屋」、「椅子」、「倉」、「垣根」、「塀」、「縁側」があった。「縁側」は保有率が77.0%とかなり高いにもかかわらず、裕福度に関係している点が興味深い。また、保有率が低いのに裕福度との関連性が認められないものは「いろり」であるが、「いろり」を保有する127世帯のうち87.4%にあたる111世帯は農業世帯であった。また、「いろり」を保有する世帯の88.2%の112世帯は「かまど」も保有しており、「いろり」は調理目的のだけから設置されたのではなく、暖を取る目的が大きいいため、保有率と関連するのは、経済的要因よりもむしろ家業や地域的・気候的要因である⁽⁵⁾と考えられる。

表26 設備・備品の保有と世帯の裕福度

設備・備品	保有世帯数	階層別保有数				
		裕福	平均的	裕福でない	不明	
仏壇	276	97	135	40	4	$\chi^2=1.582, p=0.454$
時計	267	100	127	37	3	$\chi^2=8.300, p=0.016$
かまど	264	94	128	40	2	$\chi^2=0.951, p=0.622$
土間	261	92	128	38	3	$\chi^2=1.086, p=0.581$
縁側	245	90	122	29	4	$\chi^2=10.727, p<0.005$
前庭	209	81	100	25	3	$\chi^2=8.437, p=0.015$
神棚	209	81	94	33	1	$\chi^2=5.700, p=0.058$
井戸	205	79	94	29	3	$\chi^2=4.847, p=0.089$
廊下	179	79	81	16	3	$\chi^2=23.908, p<0.001$
ガラス窓	164	74	71	17	2	$\chi^2=19.504, p<0.001$
両親の部屋	162	69	77	14	2	$\chi^2=16.633, p<0.001$
自分の勉強机	145	71	60	13	1	$\chi^2=27.128, p<0.001$
垣根	128	57	56	13	2	$\chi^2=11.648, p=0.003$
いろり	127	41	67	18	1	$\chi^2=1.038, p=0.595$
塀	89	42	37	8	2	$\chi^2=10.784, p<0.005$
椅子	80	41	33	6	0	$\chi^2=14.512, p<0.001$
倉	79	40	33	6	0	$\chi^2=13.376, p=0.001$
門	70	38	26	5	1	$\chi^2=17.082, p<0.001$
自分の部屋	66	39	19	6	2	$\chi^2=24.392, p<0.001$

(df=2)

そこで次に住居設備や備品の保有が家業とどのように関わるのかを知るために、世帯を農業と非農業に分けてそれぞれの保有状況を調べた。結果は表27にまとめているとおりである。農業世帯であることと保有率の高さが特に関係していると認められるのは「いろり」、「倉」、「前庭」、「縁側」であり、「土間」、「かまど」についても関連性が大きい。これらはいずれも農業生産や農村生活に必要な住居設備であろう。また、非農業世帯に保有率が高くなっているものは、「ガラス窓」、「椅子」、「自分の部屋」などで、いずれも住宅の洋風化や個室化など住生活の近代的要素に当たる設備・備品である。逆に農業世帯であっても非農業世帯であっても保有状況に違いが認められないものとして、「時計」、「垣根」、「両親の部屋」、「神棚」、「自分の勉強机」、「仏壇」、「井戸」が挙げられる。

表27 設備・備品の保有と家業 人

設備・備品	農業世帯	非農業世帯	合計	
仏壇	168	105	273	$\chi^2=5.935, p=0.015$
時計	158	108	266	$\chi^2=0.167, p=0.683$
かまど	163	98	261	$\chi^2=7.983, p<0.005$
土間	163	96	259	$\chi^2=9.858, p=0.002$
縁側	154	87	241	$\chi^2=10.635, p=0.001$
前庭	141	67	208	$\chi^2=20.033, p<0.001$
神棚	126	82	208	$\chi^2=0.701, p=0.402$
井戸	130	73	203	$\chi^2=6.225, p=0.013$
廊下	94	83	177	$\chi^2=5.657, p=0.017$
ガラス窓	78	86	164	$\chi^2=18.291, p<0.001$
両親の部屋	91	69	160	$\chi^2=0.562, p=0.453$
自分の勉強机	79	65	144	$\chi^2=1.808, p=0.179$
垣根	77	50	127	$\chi^2=0.258, p=0.611$
いろり	111	15	126	$\chi^2=74.021, p<0.001$
塀	42	45	87	$\chi^2=5.630, p=0.018$
椅子	32	48	80	$\chi^2=15.871, p<0.001$
倉	64	14	78	$\chi^2=22.946, p<0.001$
門	32	37	69	$\chi^2=5.746, p=0.017$
自分の部屋	26	40	66	$\chi^2=13.159, p<0.001$
有効回答	185	129	314	(df=1)

風呂と便所については母屋の内外どちらに設置しているかも含めて保有状況を尋ねたが、結果は表28に示すとおりとなった。風呂は全体の91.5%の291世帯が設置しており、自家風呂がなかった25世帯のうち76.0%の19世帯が非農業世帯である。自家風呂のある291世帯のうち、母屋内に風呂を設置しているのが142世帯(48.8%)、母屋外に設置しているのが149世帯(51.2%)で、母屋外の方がわずかではあるが多かった。風呂の位置と家業の関わ

表28 風呂と便所の保有状況 人

	風呂	便所
母屋内	142(44.7%)	119(37.4%)
母屋外	149(46.9%)	139(43.7%)
両方	0(0.0%)	60(18.9%)
なし	25(7.9%)	0(0.0%)
不明	2(0.6%)	0(0.0%)
合計	318(100.0%)	318(100.0%)

表29 風呂の保有状況と家業 人

	農業	非農業	合計
母屋内	68	72	142
母屋外	110	37	149
なし	6	19	25
不明	1	1	2
合計	185	129	318

$\chi^2=34.176$, $df=2$, $p<0.001$

表30 便所の保有状況と家業 人

	農業	非農業	合計
母屋内	41	78	119
母屋外	97	42	139
両方	47	13	60
合計	185	133	318

$\chi^2=45.240$, $df=2$, $p<0.001$

りを調べたところ、表29に示すとおり、農業世帯と非農業世帯で違いがあることがわかる。農業世帯では6割近い世帯が母屋外に風呂を設置している。また、風呂を設置している291世帯の入浴回数が5.3回/週であるのに対し、風呂を設置していない25世帯世帯の入浴回数は4.1回/週となっている。

便所については、表28のとおり、母屋内の設置が119世帯(37.4%)、母屋外の設置が139世帯(43.7%)で、母屋の内外両方に設置しているのが60世帯(18.9%)であった。便所の位置と家業との関わりをやはり農業世帯と非農業世帯について調べてみると、表30に示すように、風呂と同じく農家では母屋の外に便所を設置していることが多いのがわかる。

4. 間取り図に見る人々の暮らし

前項では、住居に関する調査データを整理し、住生活以外の調査項目結果と照らし合わせて比較することによって、人々の暮らしと住居との関連性を検討した。そこでは、家業や家族規模、家の経済状態が住居の規模や形状、設備に関わっていることが確かめられた。ただし、ここまでの分析は数量的データの分析によるものであり、それぞれの住まいにおける人々の暮らし方を個別に明らかにするものではない。この項では、その不足を補うため、若干の間取り図の例を示すことで、過去の住まいにおけるより具体的な人々の暮らしの跡を探ってみたい。

276票もの間取り図の有効回答の中からいくつかの例を選び出すのは難しいが、特に家業との関わりや生活の細部が間取り図に多少とも読み取ることができるものの中から、家業や世帯規模を変えてとりあげてみよう。なお、掲げている間取り図は、調査者の書いたままをできる限り忠実に再現したもので、部屋の大きさなど必ずしも正確ではないことをお断りしておく。

まず、図1は広島県山県郡の農家の例である。時代は大正末から昭和初めの頃で、その当時で築100年ほどのものだが、改築されつつも現存する家である。祖母と父母に子ども2人(男女1人ずつ)の計5人が住んでいた。父親は養子であり、経済状態は豊かではなく父母両方が働いている。家回りには垣根があったが間取り図には記されていない。井戸はなく、水は近くの川から引いており、家の中に瓶を置いて水を貯めていた。貯水池が庭にあり、水車も動かしていた。屋根は吹き抜きの茅葺き屋根で、冬場は茅を家の回りに立てかけて寒さをしのぐ工夫もしていた。部屋数は5部屋でそれぞれ名前がつけられている。おそらく表側に位置する4部屋がもともとあって、奥の四畳の間は後に付け足されたものであろう。暖房用として茶の間にいろりが、他の3部屋にも掘りごたつが設けられ、冬の寒さに対する備えがなされていた。この世帯では食事には箱膳をもっぱら用いてい

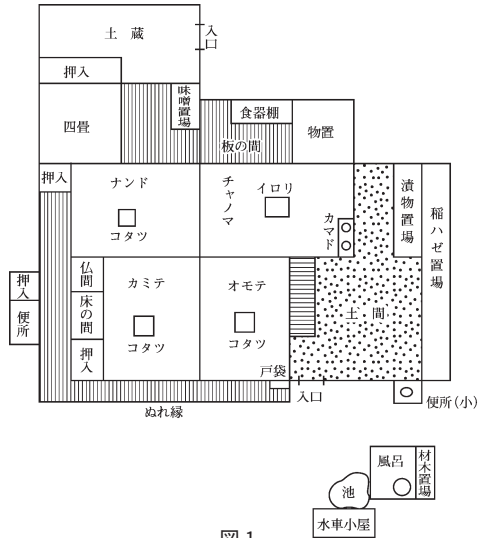


図 1

たため、いろりは暖房が主目的である。部屋以外にも味噌や漬物置場などの物置、稲ハゼ置場が設置され、外の風呂の横には材木置場がある。便所は内の縁側横に1つ、土間を出た外側に小用の便所が1つある。両親や子どものための部屋は特に決められていなかったようだが、子供用の勉強机は与えられていた。食べ物の好き嫌いを言って暗い土蔵に入れられる罰を受けた思い出が、調査対象者には強く残っているようである。

同じ農家でも大世帯の例が次の図2で、広島県比婆郡の地主の家である。時代は大正中期ごろで、当時で築110年ほどであり、倉以外は現存しているとのことである。祖父母、父母、子ども4人(男3人、女1人)、おばといとこが7人(男3人、女4人)、使用人2人(男女各1人)の計18人が住んでいた。父親は次男坊だが、祖父母と同居し、長兄の妻子も同居している。父母ともに働き、経済的には豊かであった。家は土塀に囲まれており、石段を登って正面の門を入ると家の表口に続く。井戸はなく谷水から水を摂取していた。裏庭の縁側は池に面している。屋根は瓦屋根で、倉が主屋の両側に置かれ、右側奥には米倉もあった。農具を収める納屋や物置が家の

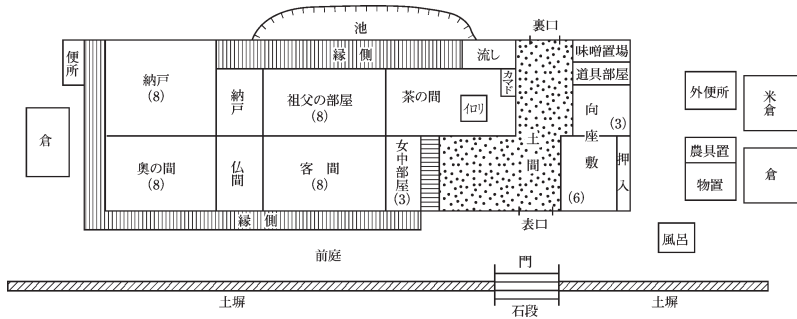


図 2

外に、味噌置場や道具部屋が家の中に設けられ、風呂場は外に設置されていた。便所は外便所と縁側の端に設けられた内便所の2つがあった。部屋は小さいものを入れて10部屋ある。図中の括弧内の数字は畳数を示している。特に茶の間横の祖父の部屋と土間の上がり口にある3畳の女中部屋が間取り図では特定されているが、他の大勢の家族がどのような部屋の使い方をしたのかは不明である。両親の部屋は決まっていたようであるから、おそらく奥の納戸がそれに当てられていたのではないかと思うが、子どもたちやおば一家がともに休んだのか、別に休んでいたのかはわからない。下男の寝場所がどこかも不明である。食事は箱膳でいつも揃って食べることになっていたから、一家の茶の間での食事風景はさぞ壮観だったことだろう。

図3に示すのは、広島県双三郡で酒屋を営んでいた家の間取り図である。時代は昭和の初めで、当時の築年数がおよそ100年であった。現在この家はまったく残っていない。道路に店舗が面する二階建ての瓦葺きの家である。世帯は父母と子ども4人(男3人、女1人)の6人家族から成り、働き手は父親だけで、経済状態は平均的であったようだ。店を抜けると町家風に土間がまっすぐ奥へ伸び、その右手に部屋が配置され、その中ほどには中庭も設けられている。風呂、便所、水場、物置などは奥にあり、風呂焚きは子どもの役目となっていた。かまどや流しなどはその手前の土間に設置さ

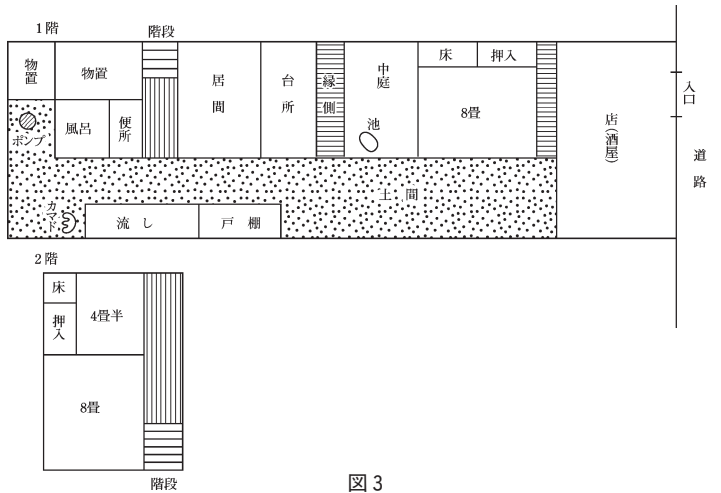
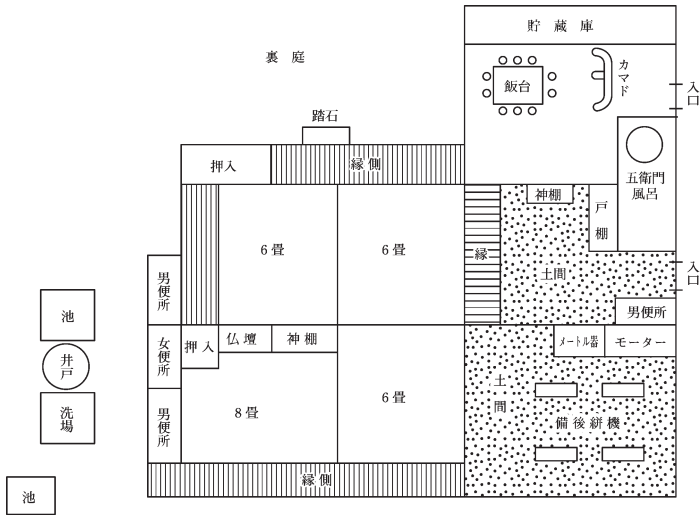


図 3

れている。居間の横に二階への階段があって、部屋数は合わせて5部屋あった。部屋の呼び名は台所と居間以外は特に記入されておらず、両親の部屋は決められていたようだが、どの部屋であったかは不明である。子どもの部屋ははっきりと決められてはいなかった。食卓はちゃぶ台を用いており、おそらく居間に置かれていたのだろう。商家ではあっても食事は家族揃ってゆっくりとることができたようだが、食事中のおしゃべりは行儀の悪いこととされていて、静かな食事風景であったようだ。

最後の図4は、製造業を営む世帯の例である。場所は広島県御調郡で、時代は昭和初期であるが、当時において築60年ほどの家であった。現存はしていない。屋根は瓦葺きと藁葺き両方が混合した平屋である。父母に子ども6人(男女各3人)の家族だが、長男にはすでに妻がいて親世帯と同居しており、全部で9人の世帯である。父親は大工、母親は家内で備後紘の織りと仕立ての仕事をしており、年嵩の子どもたちがそれを手伝っている。父親は養子である。経済状態は裕福な方である。家屋は左側に4つの座敷が田の字型に配され、右側には土間部分があり、住まいの部分と作業場の部分にうまく分割されているように見える。表側の土間は、機や動力モー



表庭

図 4

ターなどが置かれる作業場である。ここで母親と子どもたちが作業をしていたのであろう。便所が入り口近くの土間と家屋の裏側に複数設けられている。家族だけではなく他に雇用されている人々がいたのかもしれない。便所はすべて外便所となっている。奥の土間には五右衛門風呂が設置されていて、毎日入浴するのが習慣となっていた。仕事上の必要もあるためか、井戸や池が家のすぐ近くに置かれている。水道もこの頃には引かれていて、水は豊富に使えたようだ。土間の奥にはかまどと飯台のある部屋があり、ここが食事場所となっていた。家族揃っておしゃべりをしながら食事をするのが大変楽しみだったそうである。部屋数はこの部屋を入れて5部屋で、両親の部屋や子どもたちの部屋は特に決まっていなかったようだが、長男夫婦と年嵩の子どもたちがどのように住み分けて部屋を用いていたのか気になるところではある。

5. まとめ

以上、平成12年度におこなった生活史調査から、調査対象者の子ども時代の住生活について分析した結果を述べてきた。調査対象者の生年から考えると、調査の対象時期は20世紀前半、明治末から太平洋戦争前夜までのかなり長い時期にわたるものである。地域的には当時広島県内在住が半数以上、中四国地方在住が9割を占め、この地域に偏ったものとなっている。約3分の2の世帯が核家族世帯、残る3分の1が祖父母が含まれる拡大世帯で、家族数の平均は6.9人。兼業を合わせると6割近い世帯が農家であった。

住居は8割近くが一戸建てで、これは農業世帯が多いことと関連している。築年数はその当時で30年以下という答が半数近くを占め、明治期以前に遡るような年代を経た家はきわめて少数だったと言える。1住居当たりの部屋数は4～5部屋が多く、平均部屋数は5.1部屋である。部屋数の大小は世帯人数や家の裕福度との関連性が大であることが明らかとなったが、核家族と拡大家族の差は認められない。三世代同居時の住まい方が各家庭でどのように工夫されていたのか、興味深いところである。

住居設備、備品などについて、家業や家の裕福度との関連性を調べたが、農業世帯であることと保有が結びつくものとして、藁葺・茅葺屋根をはじめとして、いろり、倉、前庭、縁側、土間、かまどなどが挙げられ、そのうち、倉と縁側については裕福度との関連がさらに認められた。非農業世帯であることと保有が結びつくものとしては、ガラス窓、椅子、自分の部屋が挙げられ、それらはすべて家の裕福度とも関連が大きかった。農業・非農業という家業の別なく保有されるもののうち、裕福であることとと保有が関連しているものとしては、自分の勉強机、廊下、門、両親の部屋、垣根、塀が挙げられる。そして、家業や裕福度の別なく家庭で保有しているものとしては、時計、神棚、仏壇、井戸が挙げられる。これを見ると、かつて農家の特徴であった設備・備品が今日ほぼ一般住居から姿を消し、

代わって普及を進めているのは、非農業世帯の特徴であった設備・備品と、家業の別なく裕福さと関連があった設備・備品であることがわかる。すなわち、かつての住居がいかに生活の生産部分に密接に関わって形作られていたか、逆に言うと、現代のわれわれの住居がいかにその生産部分と切り離され、生活の消費部分にのみ機能を特化してきたかということが跡づけられるのである。これは、本稿でとりあげた当時の住居の間取り図と、今日の住居の間取り図を比較しても明らかとなるであろう。

本稿で示すことができたのは、過去の人々の住まいや暮らし方のごく限られた側面ではかないが、当時を知る人々の、いまや失われる寸前の記憶にもとづいて、過去の生活を復元していくことの重要性和緊急性を再認識できたと考えている。今後、さらにデータを拡充し、さまざまな側面からの分析を進めることを課題としたい。

注

- (1) なお、民家とは広義には一般庶民が住む家を指し、狭義には江戸時代以前の農家や町家を指すが、ここでは戦前の一般住居すべてを調査の対象としている。
- (2) 本調査は、同様の一連の調査の部分を成すものである。詳しくは以下参照のこと。末広菜穂子、石田美清『中国・四国地方における大正・昭和初期の子どもの生活(上)―家庭・学校生活に関する平成3年度調査―』〔広島経済大学研究論集〕第15巻2号、1992年、末広菜穂子、石田美清『中国・四国地方における大正・昭和初期の子どもの生活(下)―家庭・学校生活に関する平成3年度調査―』〔広島経済大学研究論集〕第15巻4号、1993年、末広菜穂子、石田美清『大正・昭和初期における家庭生活―中国・四国地方での調査から―』〔広島経済大学経済研究論集〕第16巻2号、1993年、末広菜穂子、石田美清『太平洋戦争前の子どもの家庭生活―平成5年度調査より―』〔広島経済大学経済研究論集〕第18巻4号、1996年、末広菜穂子、石田美清、竹林栄治『家庭生活の世代間変化と生活文化の継承性―子ども時代の生活に関する中四国地方での調査より―』広島経済大学研究双書第28冊、2007年。
- (3) また、特に本稿執筆に際し、調査データの整理や入力に常に熱意を持って尽力いただいている由井敦子さんに心より御礼申し上げる。
- (4) 中国地方の民家建築についての詳細な研究には、鶴藤鹿忠『中国地方の民家』明

玄書房, 1961年がある。広島県の民家については, 村岡淺夫編『広島県民族資料 3 すまいと衣食』三国書院, 1965年など。

- (5) いろいろがあったと回答した127人のうち, いろり端でもっぱら食事をとっていたと答えたのは8人(6.3%), 食事をとる場所の一つとしていろり端を用いていたと答えたのは35人(27.6%)だった。また同じ127人のうち, 暖房設備としていろりのみを用いていたと答えたのは14(11.0%)人, 暖房設備の一つとしていろりを用いていたと答えたのは102人(80.3%)であった。